
 巻 頭 言

会誌「表面科学」のこれから



杉 井 清 昌

(1989, 1990 年度編集委員長)

この2年間、会誌編集のお世話をさせていただいた。1年目は学会創立10周年の記念特集づくりに奔走し、2年目は会誌月刊化に向けた編集事務体制づくりに悪戦苦闘した。にもかかわらず、会員の皆様が会誌「表面科学」のレベル維持を認めていただけたら、それはひとえに玉稿を賜った執筆者、企画に腕を奮われた編集委員、それに常に緊張を伴う編集事務と印刷を担当された方々のおかげである。この場をお借りして御礼申し上げる。

編集の現場にいる間、常々感じていたことを述べさせていただく。会誌は「学会の顔」といわれる。もしそうであれば、表面科学会の存在する意義は何かという原点を問い直し、それに立脚した形で、会誌＝学会の顔としたいものだと考えていた。第10巻・第8号記念特集(1)を企画した動機はそこにある。「創立10周年記念座談会」に登場された各界権威の方々から、「表面科学会への期待」との問いに関して賜った言葉のいくつかを紹介させていただく。

「境界領域で特徴を出せ」(北原文雄先生)

「理学と工学の接点となれ」(市ノ川竹男先生)

すでに表面科学会は「表面物理・化学」, 「表面・界面分析」, 「表面処理」, 「薄膜」, 「新技術」の5分野で運営するところまで成長した。「境界領域で特徴を出せ」とのご指摘に応えていくためには、まずこれらの分野間に積極的な相互作用を起こさせることから始まるのであろう。そのためには地道ではあるが、相互作用誘起を意識した各種シンポジウム、研究会などの活動が基本となる。これらの活動と会誌の間でポジティブフィードバックが生じたところに、世界的にも例のない本学会の存在意義が鮮明となろう。

またわが国の進んだLSIプロセスや結晶成長技術を目の当たりにするとき、「理学と工学の接点となれ」とのご指摘は、多くの方の実感と一致すると思われる。事実、極薄絶縁膜構造、金属/半導体界面、マイグレーション、ステップフロー等々に関し、表面科学的アプローチが威力を発揮する研究テーマが数多くある。この相互作用を促進することにより次世代の科学や技術につながる発見・発明が出て来るのではとの予感をもつ。まさに「技術のほうが進んで、基礎的な方向へ向かう。かつての欧米がそうであった。」(高良和武先生)の言葉どおりとなるのであろう。

研究の宝庫といわれる表面科学である。この地の利を活かして、会誌「表面科学」がますます発展していくことを祈ってやまない。

(NTT 光エレクトロニクス研究所)